

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2018年4月10日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井直光

御言葉（みことば）はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。

（ローマの信徒への手紙 10:8 2018年度松蔭中高 年間聖句）

新年度のスタートにあたって 今年度の学校運営方針

公立校の先生の働き方が何かと取沙汰されていますが、私立学校の教員は公務員とは異なり、労働基準法が適用され、労働時間に関しては民間企業と同様の扱いとなります。本校でも教員の働き方改革を推進していますが、その一環として出退勤時にICカードをかざして記録するシステムを今月より導入しています。職員室の扉の「タイムレコーダーにタッチしてください」との教員向け掲示を見た高校生でしょうか、「松蔭、変わり過ぎ」という会話が廊下から校長室へ聞こえてきました。6日制導入で学校生活のパターンが変わり、生徒にはストレスとなることですが、「学校の枠組みが変わることを、自分が変わるチャンスとしてほしい」と語ってきた私としては、学校の変化を実感している様子にはくそ笑むのです。ちなみにその後の会話で「先生の働き方何とかがうん？」と続いたので、「おっ、世の中の動きも少しは知っているな」と再び口元がゆるみました。今年度の学校運営方針については、下記4項目としています。この方針にもとづいて、さまざまな取り組みを進めてまいります。役職者についてもお知らせします。よろしくお願いいたします。

- (1) スクールモットー「Open Heart, Open Mind」（心を開いて、思いを自由に）の精神を日々の教育実践に生かす。
- (2) 「英語の松蔭」のブランディングをはかり、英語教育・グローバル教育を推進するとともに、希望進路に見合う学力の定着をはかる。
- (3) 女性のリーダーシップを育み、主体的な生き方を育むプロジェクト型学習の手法をBlue Earth Projectだけでなく、学校行事等の取り組みに導入し、キャリア教育を推進する。
- (4) 生徒の安全を絶対のものとして確保し、保護者の安心感を高める措置を講じる。

2018年度松蔭中学校 松蔭高等学校の役職者（教員は担当教科名）

理事長：中村豊	校長：浅井直光（社会）	事務長：平田健二
中学副校長：番場靖子（家庭）	高校副校長：芳田克巳（国語）	
学年主任： 岳藤瑞枝（中1・国語）	永井晃（中2・英語）	岳藤史泰（中3・保健体育）
吉川祐子（高1・数学）	上原美由紀（高2・国語）	奥田豊弘（高3・社会）
部長： 赤尾友規（宗教部・社会）	大槻泰史（教務部・理科）	中川雅博（生徒部・数学）
若木浩幸（総務部・社会）	佐々木聡（進路指導部・国語）	小林裕典（入試広報室・数学）

始業式のお話 「自分は自分の主人公。世界でただ一人の自分を創っていく責任者」

始業式では「自分を創（つく）る」というテーマで、新学年のスタートにあたって生徒にエールを送りました。講話内容を紹介します。

1年のスタートにあたり、今日は「自分を創（つく）る」というテーマで話します。皆さんは自分を創っていますか？「自分をつくる」というと、自分を人に良く見られたいために無理をしていい人ぶる、友達の前では平静を装っても、実際には傷ついている自分の本心を隠したりする。本当の自分らしさを隠して、とりつくろうような場合を考えてしまうかもしれません。私が言う「創る」というのは、「自分を創り上げる」という意味で未来志向です。将来のことです。明日からの自分をどうするか、ということです。世間ではライザップやらボディーメイク、ボディーデザインとやらがあって、トレーニングをしながら栄養バランスのある食事を取り、自分の体形を理想的に作るという商品とのことですが、私がいう「自分を創る」というのは中身が中心です。中身が空っぽでは、いくらボディーメイクしてもそれは、うわべを良く見せているだけに過ぎません。

ある小学校の校長先生の言葉を紹介したいと思います。東井義雄（とおいよしお）さんと言って、兵庫県の豊岡の小学校の校長先生をされていた方で、お坊さんでもあります。先生がお坊さんというと妙に感じるかもしれませんが、地方に行くときよくお坊さんで学校の先生という方がおられます。すでに亡くなっていますが、子供のための詩を書いたり、お坊さんの立場から仏様や阿弥陀様の教えについての詩をたくさん残しておられます。彼が記した文章のなかでも私が好きな言葉は、「自分は自分の主人公。世界でただ一人の自分を創っていく責任者」という一節です。前半の「自分は自分の主人公」という言葉は、よく耳にすることがありますが、特に気に入っている箇所は、後半の、「世界でただ一人の自分」を創る、ということと「自分がその責任者」であるということです。責任とは、とても重たい言葉です。何か事件が起こったり、良くない問題があった場合に責任は誰々にある、という言い方をします。引責辞任、つまり責任を取って辞める、という言い方もあって、よく政治家や官僚が、良くない発言をしたと批判を受け、責任を取って議員を辞める、大臣を辞める、ということがありました。先月ですと財務省の佐川さんが国税庁長官を辞任し、その後、国会で証人喚問を受けていましたね。

東井義雄さんがいう責任とは、良くないことや悪い結果のことではなくて、未来の自分を良くする責任という意味で使っておられると思うのです。自分を、より素晴らしい人へと近づける責任だと思うのです。それは、周りの人や、親や先生がやってくれるのではなく、自分しか自分を良くすることはできない、ということなのです。明日から皆さんの学校生活の枠組みが大きく変わることになります。新入生も内部で進級、進学した人も、この場にいる皆さん全員にとって、土曜日は去年まで授業がない日でしたが、これから6日制の授業となります。嫌だなという皆さんの思いは理解しますが、マイナスにばかり受け止めて、ネガティブな感情に自分が振り回されることが、決してないようにしてほしいと思います。以前からこの変更を、自分を変えるチャンスにさせていただきたいとお伝えしてきました。自分を変えるということは、これから「自分を創る」毎日を送る、ということです。東井さん流に言うと、世界でただ一人の自分を創る日々を送るわけです。（裏面に続く）

しかもそれができるのは自分しかいません。自分の責任です。

先週、春休みということで 18 歳の「元松蔭生」が学校に遊びに来ました。「元松蔭生」という理由は、彼女が松蔭を卒業していないからです。彼女は幼いころからバレエのレッスンを受けていました。中学3年の冬、半年後にヨーロッパのハンガリーバレエ学校に留学することになり、高校1年の秋からバレエ留学という形で現地に行きました。その後、彼女はバレエに打ち込むために、松蔭を退学することを決意しました。ヨーロッパへのバレエ留学という決断の次のステップとして、彼女は松蔭を辞めることを決め、次の行動を起こしたわけです。英語とハンガリー語の2か国語を使用する2年半のレッスンを経て、一時帰国して松蔭に遊びに来てくれたわけです。そしてバレエ学校を卒業後には、現地バレエ団への入団も決まっていると話してくれました。

彼女の話聞いてみると、大きな決断を重ねてまさに自分を創っている、世界でただ一人の自分を自分の責任で創っていると感じました。もちろん彼女のこれからの人生においては、舞台芸術の世界の厳しい試練が待ち受けているはずですが、彼女ならその試練に打ち勝ち、困難を乗り越えることができると確信しました。

すべての松蔭生の皆さんに、同じことをせよ、と言っているわけではありません。自分流の自分の創り方をすればよいのです。自分の創り方の秘訣はたった一つ。決断と行動です。自分で行動を起こすことです。些細（ささい）なことでも構いませんから何かを始めることです。変な例ですが、私は毎朝玄関で、左足から靴を履く癖がありますが、いつも左足から靴を履く人が右足から履いてみようとするのが行動を起こすことです。英単語を毎日3つずつ毎日覚え始めるのが行動を起こすことです。勇気をもって行動し、自分を創り始めましょう。あなたは「世界でただ一人の自分を創っていく責任者」です。1学期末には、「〇〇さんは何か感じが変わったみたい」と職員室で先生方と言葉が交わせることを期待しています。(4月9日始業式校長講話より)

今年度もPTA活動にご協力を

PTA 会長、副会長の信任投票期間が始まっています。「できる人ができる範囲で、楽しみながら一緒に PTA 活動」がモットーです。ご協力をよろしくお願いいたします。

English Room ができました

「英語の松蔭」プロジェクトは、インターナショナルスクールでの活動をはじめ、他校にはない英語学習の機会を設けてきました。今回は English Room 開室のお知らせです。靴を脱いで入室するカーペット敷のこの部屋は、「Let's use English」の掲示通り、リラックスしながら楽しく英語を話そうという空間です。場所は 2F でエレベーター出入口のすぐ隣の部屋です。利用時間は平日昼休みと放課後で、English Room Staff が常駐します。もちろん英語特別クラスの副担任のリナ先生とデイビッド先生も時間が許す限り在室しています。まずは英語の耳慣らしだけでも、という生徒も勇気を出して入室してほしいものです。(写真は入口と内部の様子です)

